干潟海岸に対する児童生徒の環境意識

九州大学工学部　学生会員　○本原誠二　森本剣太郎
正会員　入江　功　太田亜矢　小野信幸

1．はじめに

ここ数年，有明海の諫早湾干拓の問題などから，干潟海岸の環境を再認識しようという動きが高まってきている．干潟海岸は，様々な生物の宝庫であり，海水浄化作用等といった特殊な機能も持ち合わせている．しかしながら，砂浜．磯浜，干潟など様々な海岸の環境を同じ尺度で評価しようとすると，干潟海岸は砂浜海岸と比較して非常に低く評価される傾向がある．(入江ら，2001)

本研究では，日頃から干潟海岸に触れ合う機会の多い小･中学生を対象にアンケート調査を実施し，彼らが干潟海岸に対してどのような環境意識をもち，干潟海岸の良さをどのように認識しているのかを抽出することによって，干潟海岸に対する新たな評価価値を見出すことを目的とした．

2．アンケート調査の概要

図-1に示す和白，曽根，熊本，有明地区の4ヶ所の干潟海岸を調査地点とした．それぞれの地区において，干潟に近い小学校2校（4年生），中学校1校（1年生）をアンケート調査の対象とした．アンケート調査は，事前にアンケートの概要と方針をそれぞれの学校と打ち合わせを行い，2001年12月の1ヶ月の間に各学校の都合に併せて行った．

アンケートの内容は2部構成からなり，「その1」では，「干潟海岸の良さ」が抽出できるように選択方式と自由記述方式の全27問の質問（表-1）とした．また「その2」では，干潟の近くに住む児童生徒がどのような干潟海岸を望んでいるかを絵に自由に描いてもらうという新しい試みを行った．

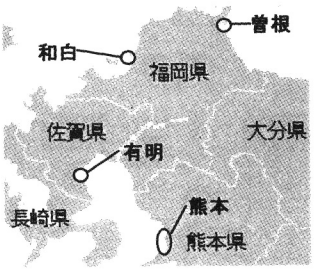

図-1　調査地点

表-1　設問内容

1	「海岸」という言葉からどのようなことを思いうかべますか？（いくつでも○をつけてください）
2	次の言葉を知っていますか？（いくつでも○をつけてください）
3	「ひがた」へは，よく行きますか？　（一番近いものに○をつけてください）
4	「ひがた」へは，主にだれと行きますか？（1つだけ○をつけてください）
5	「ひがた」へはなにをしに行きますか？
6	「ひがた」は，干潮（海がひいているとき），満潮（海が満ちているとき）のどちらの時が好きですか？
7	「ひがた」の干潮（海がひいているとき），満潮（海が満ちているとき）の風景からどんな感じを受けますか？
8	あなたは，よく「ひがた」に入りますか？
9	「ひがた」にはどうやって入りますか？（入らない人は次の質問へ進んでください．）
10	あなたは，「ひがた」に行ってきけんだと感じたことがありますか？
11	近くの「ひがた」の海があれているとき，こわいと思ったことがありますか？
12	あなたは，「ひがた」にいる生き物にきょうみがありますか？
13	あなたにとって，「ひがた」に住んでいる生き物は大切ですか？
14	近くにある「ひがた」は，よごれていると思いますか？
15	「ひがた」でイベントがあったとしたら，どのようなイベントがあってほしいですか？
16	最近，特に「ひがた」を守ろうとする活動がさかんになっていることを知っていますか？
17	そういう話は，いつもどこから聞きますか？（聞かない人は次の質問へ進んでください．）
18	「ひがた」海岸は，あなたが大人になっても残っていてほしいですか？また，それはどうしてですか？
19	もしも近くの「ひがた」が「すなはま」だったら，よいと思いますか？またそれはどうしてですか？
20	あなたの学年は？
21	あなたはせい別は？
22	あなたが，学校の休みの日によくやっていることはなんですか？
23	あなたの家は，海からどのくらいのはなれていますか？
24	あなたのお父さん(お母さん)は，次の中でどの仕事をしていますか？
25	今年の夏休みに，あなたはなん回海に行きましたか？
26	よく行く海の場所はどこですか？（いくつでも○をつけてください）
27	その海に行く目的は？（いくつでも○をつけて下さい）

3．アンケート調査の結果と考察

回答数は，小学生589人，中学生768人であり，最終的な有効回答者数はそれぞれ409人，586人であった．表－1の質問項目は大きく分けて以下の4つに分類され，それぞれ，①被験者に対する基本的な質問と日常生活について（質問1，2，20～27），②日常的に干潟に接しているか，および干潟で何をするのかについて（質問3～9），③干潟の生態系，危険度，汚れ具合などの具体的イメージについて（質問10～14)），④干潟の現状把握とこれからのあり方について（質問15～19)）である．図-2はそれぞれの代表的な設問について集計した結果である．図中、小中学校の平均（全)、小学校(小)、中学校（中）とし、和白・曽根・熊本・有明をそれぞれ(和)、(曽)、(熊)、(有)

としている。分析の結果、小・中学校の総平均では、4つの地区間の結果は非常に類似していたが、小・中学校同志の間では、かなりの違いが見られた。まず、図中最上段の干潟に行く頻度に関する質問3については、出来るだけ、干潟海岸に近い学校を選んだにもかかわらず、思ったより干潟に日常行く回数は少なかった。質問4の「誰と行くか」については、小学生が、「父母と行く」と答えたのに加え、「その他」が多くなっている。これは、ヒヤリングした限りでは学校が常日頃から環境教育の一環として干潟につれて行っているためと思われる。同図中、熊本が父母と行く割合が多いのは、この学校に通う生徒が干潟海岸に遠い場所に住み、休日に車で行くためと思われる。何れにしても、小学生が学校あるいは両親の教育を通じて干潟を学んでいる事がわかる。このことが、質問１２，１３の、小学生の干潟の生物に対する興味や大切さの理解にも反映されているようである。更に、質問１８や質問１９の結果に見られるように、「大人になっても残って欲しい」や、「干潟が砂浜に代わって欲しくない」などの小学生の高い要望にも、これらのことが現われているようである。表－１の質問１において、「海岸という言葉」からは、「白い砂浜に青い海」「魚釣りや散歩・休憩」などを連想することは、小・中学生とも同様であるが、干潟に対する憧憬，愛着心は、小学生への干潟教育や、干潟遊びから自然に学ぶことによって育まれているように思われる。

４．おわりに

児童生徒にとっての干潟海岸は，生物と触れ合いながらその大切さを理解する学びや遊びの場であり，これが砂浜海岸と異なる干潟の魅力といえる．今後は，「その2」で描いてもらった干潟の将来像に対する考察や多変量解析などを用いた，より詳細な検討を進めていく予定である．

謝辞：本研究のアンケート調査は，和白,奈多,曽根,曽根東,網津,飽田西,七浦,浜の８校の小学校，および和白,曽根,天明,東部の４校の中学校の児童生徒・職員の皆様に快くご協力していただきました．ここに記して感謝の意を表します．

参考文献

入江　功ら(2001):人々の創意に基づく海岸環境の評価手法に関する研究，海岸工学論文集，第48巻，pp.1336-1340.

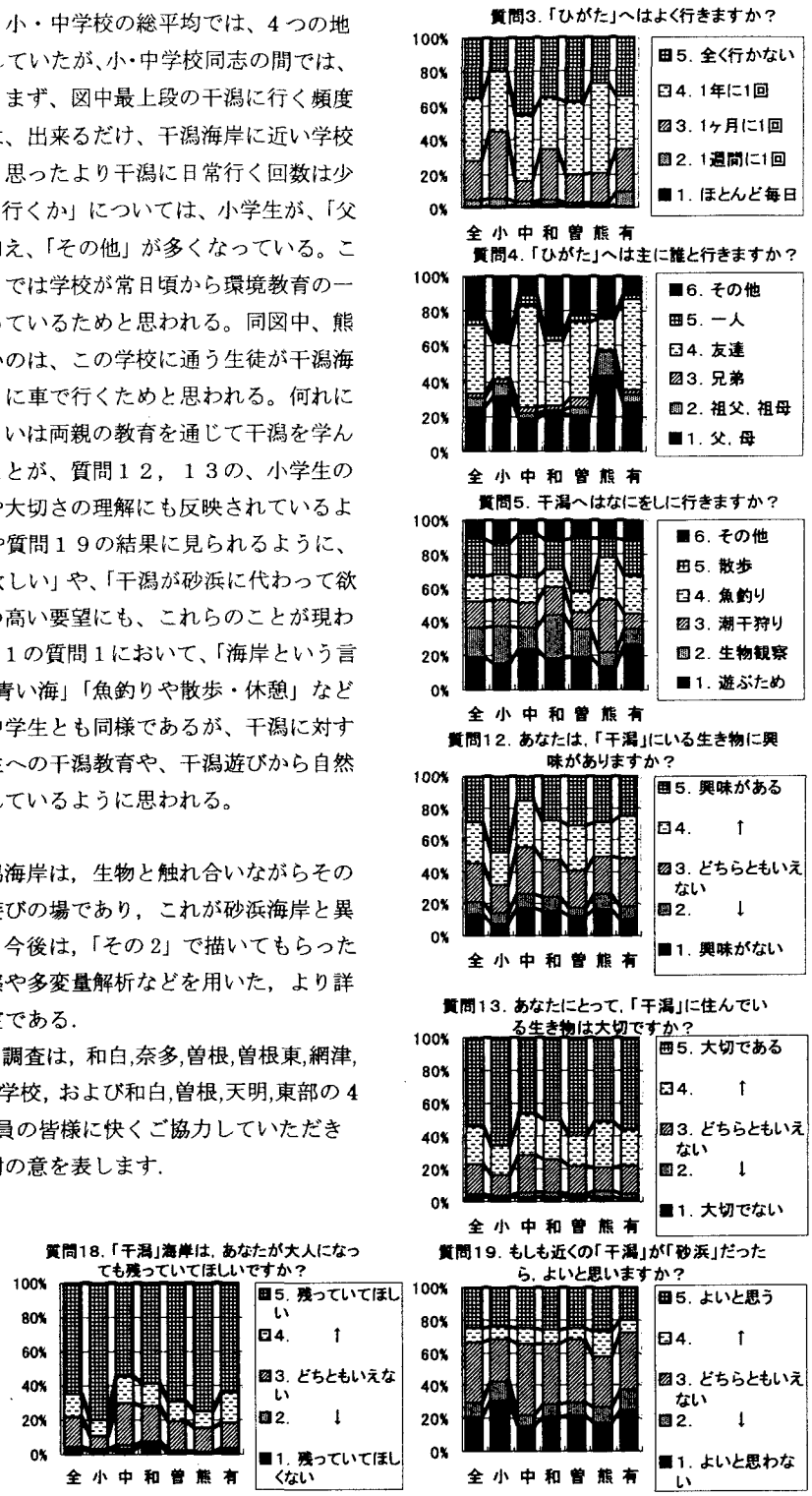

図-2　回答の割合

（全：全回答者,小:小学校全体,中:中学校全体,和:和白地区,曽:曽根地区,熊:熊本地区,有:有明地区）